2020年7月

真宗大谷派 京都教区 教化広報誌

教区だより

特別号

Vol.3

「今、この時に、親鸞聖人に遇う」

「問う者から、問われる者へ」

東京教区因速寺住職　武田（たけだ）　定光（じょうこう）　氏

◎『教区だより』特別号　について

　新型コロナウイルスの感染拡大の影響により、『教区だより』は通常の編集体制が取れなくなったため、５月より京都教務所の編集責任により、「特別号」を発行しております。

　通常の体制に戻るまでの間、引き続き特別号というかたちで発行してまいりますので、教区の皆様にはご理解いただきますようお願いいたします。

『教区だより』特別号の発行について

新型コロナウイルスの猛威が世界中を不安に陥れ、私たちの日本社会も計り知れない不安の只中にあります。

これまで「当たり前」にしていたことが当たり前ではなくなった現実に直面し、あらためて考えさせられること、気づかされることも多々あるのではないかと思います。

私たちが当たり前にしてきた「日常」とは、実はどこにも約束されていない奇跡の連続であり、また人間の自我分別が思い描く理想は、常に事実の前に屈服せざるを得ないという道理も教えられます。

いま、私たちは早期の事態終息を深く願いながらも、このような時だからこそ、浄土真実を宗とする宗祖親鸞聖人の教えに身をさらし、聖人の教えに出遇い直していくことが大切ではないかと思います。

このような願いから、京都教務所では「今、この時に、親鸞聖人に遇う」というテーマのもと、『教区だより』特別号を発行してまいります。

京都教区教化委員長　日野　隆文

「今、この時に、親鸞聖人に遇う」

「問う者から、問われる者へ」

東京教区因速寺住職　武田　定光

「いま、この時に」

この連載テーマにある「今、この時に」とは、全世界を席巻するコロナウイルス騒動を念頭に置かれていると思われます。ひととひとのつながりを基本に形成されてきた真宗教団が、ウイルスの感染拡大不安を契機に分断されているように感じます。しかし、この騒動により、私たちは多くのことを学びました。害悪を自分以外に見たとき感染者差別や医療者差別が起こり、自粛警察なる問題まで引き起こしました。また人類の歴史が疫病と共に、いまなおあるとも学びました。人間は「人の間」と書くように、人的つながりを抜きには世界全体が動かないことを、改めて教えられました。

このウイルスが恐れられているのは、感染していても症状がすぐに現れないことと、感染してからの致死率の高さだそうです。そこで人々の関心が「如何にウイルスに感染しないように生活するか」に集中していきました。これは煎じ詰めれば、「如何に死なないように生き延びるか」という関心へ行き着きます。この「如何に」という問題さえ解決すれば、人類にとってのあらゆる問題はすべて解決するかのようです。

「如何に」と「なぜ」

ところがイエスが悪魔から、お前が神の子であるならば石をパンに変えてみろと試されたとき、彼は「人の生くるはパンのみに由るにあらず」（マタイ書）と答えました。「如何に」という質の問題をパンに象徴させて、それだけでは生きることができないと。続けてイエスは「神の口より出づる凡ての言に由る」と言いました。これは「如何に」ではなく、「なぜ」という質の問題を提起したのです。「如何に生きるか」ではなく「なぜ生きるか」という質の問題です。これは「如何に生きるか」という問題が解決してもしなくても、なお永遠に残る問題だというのです。あらゆる信仰は、この「なぜ生きるか」という人類の深い欲求に応じて、必然的に生まれてきた現象です。

おそらく親鸞もこの問いに取りつかれたのだと思います。「なぜ生きるか」という問いに取りつかれると、〈いま〉という時間が浮き彫りにされます。〈いま〉、ご飯を食べていれば、食べることの意味が問われます。〈いま〉、道を歩いていれば、歩いている意味が問われます。〈いま〉、生きることの意味を問われることは、人生は〈いま〉の連続ですから、四六時中

に渡って問い詰められていきます。親鸞に「急作急修して頭燃を灸うがごとくすれども」（『教行信証』信巻　聖典二二八頁）と言わせたものが、この問いだと思われます。人生のあらゆる場面で、生きることの意味を問われることは、この答えが見つからなければ、いかなる行為をしていても、その行為は空しく意味のないものに変質してしまいます。あたかも頭に降りかかる火の粉を振り払うようにしても、決して振り払えるものではありません。

意味の病

これを私は「意味の病」と呼びました。「なぜ生きるか」という問いに取りつかれることは、「意味の病」に取りつかれることです。「取りつかれる」という言い方をしたのは、取りつかれることも人間の都合ではなく、阿弥陀さんの摂取不捨の力だからです。摂取不捨の力ですから、逃れることもできません。それを「意味の病」と呼んだのは、意味を問う主体が自己（煩悩）になっているからです。自分が自分自身の生きる意味を問うても、それには答えは見つかりません。なぜならば、人間が問う生きる意味とは、自分にとって都合のよい意味でしかないからです。人間の問いは、「貪欲」という煩悩からしか生まれてこないのです。

思えば親鸞は、「浄土往生」という救済物語を生きる中から言葉を紡いでいきました。しかし門弟は、それを「貪欲」で受け止め、浄土＝安楽の場所（得）、地獄＝苦悩の場所（損）と誤解しました。門弟は、〈いま〉を生きている意味が「浄土＝安楽の場所」への道であれば納得しますが、「地獄＝苦悩の場所」では納得しません。それこそが「意味の病」です。

問う者から問われる者へ

私は「意味の病」からの解放を「問う者から、問われる者へ」と表現しました。「問う者」とは、自分が主体になって、自身に問うてみる方向性です。その方向性では生きる意味は見つかりません。この問いは人間が人間自身に向ける問いではなく、阿弥陀さんからの問いかけだからです。それが「問われる者へ」です。自分は問う者ではなく、問われる者にさせられたのです。それが阿弥陀さんからの問いかけとなれば、阿弥陀さんだけが答えを御存じのはずです。それで親鸞は「念仏は、まことに浄土にうまるたねにてやはんべるらん、また、地獄におつべき業にてやはんべるらん。総じてもって存知せざるなり」（『歎異抄』第二条　聖典六二七頁）と述べました。南無阿弥陀仏と発語する行為が、浄土（安楽の場所）へ往く条件か、あるいは地獄（苦悩の場所）へ往く条件か、まったく知らないというのです。なぜそう言えたのかといえば、それは、〈いま〉を阿弥陀さんに全託しているからです。そうなると、生活のあらゆる〈いま〉という時間が、阿弥陀さんへ向かって抛擲された生活として受け止め直されます。

「全託」というと、すべてをわかった上で阿弥陀さんにまかせているように聞こえますが、そうではありません。自分からすれば、それが浄土へ向かう生活かどうかはわからないのです。わからないままにおまかせすることを「全託」というのです。凡夫が自分の行く先を知った上でおまかせすることほど傲慢なことはありません。親鸞も「いそぎまいりたきこころなきものを、ことにあわれみたまうなり」（『歎異抄』第九条　聖典六三〇頁）と言っています。急いで浄土へ往きたいと思わない者をこそ阿弥陀さんは悲愛して下さると。これは浄土へ往きたくないと思うのも、また往きたいと思うのも、共に煩悩が言わせているのだと、煩悩の騙しを完全に見破った言葉です。このような「煩悩具足の凡夫」なればこそ、「他力の悲願は、かくのごときのわれらがためなりけりとしられて、いよいよたのもしくおぼゆるなり」（『歎異抄』第九条　聖典六二九頁）です。全生活の、あらゆる瞬間が、すべて阿弥陀さんからの力強い問いかけとしてあったことに目覚めたのです。

教務所からのお知らせ

《敬弔》

ご生前のご功労を偲び、謹んで哀悼の意を表します。

山城第一組　教圓寺前坊守　井上　温子　九十一歳
二〇二〇年六月八日

近江第一組　徳善寺住職　森　浩　七十六歳
二〇二〇年六月二日

近江第四組　正福寺住職　川田　彰心　八十八歳
二〇二〇年四月七日

近江第四組　立光寺住職　冨田　正　九十四歳
二〇二〇年四月二十四日

近江第十組　安立寺坊守　禿林　由子　百一歳
二〇一九年十一月十九日

［敬称略］

《教務所事務休暇について》

夏期事務休暇として、左記の期間は教務所事務の取り扱いを休止いたします。

なお、緊急（期間中の授与物のお渡しや院号法名の申請、収骨の受付等は緊急には含みません）の場合は、左記緊急連絡先にご連絡いただきますようお願いいたします。

期　間：二〇二〇年八月七日（金）～十六日（日）

緊急連絡先（教務所携帯電話）
〇九〇―三七一九―七九八二

《教区会（臨時会）議決事項の報告》

二〇二〇年六月九日（火）開催の教区会（臨時会）にて、左記のとおり議決されましたので、報告いたします。

教区会議長
深尾　浄信　近江第七組　淨敬寺

教区会副議長
川那邉　章　近江第二十六組　即得寺

教区会参事会員
亀田　晃巖　山城第二組　唯明寺
北脇　光昭　近江第四組　圓光寺
安井　廣正　近江第二十五西組　善養寺
山名　彰心　若狭第二組　浄蓮寺
長田　浩昭　丹波第三組　法傳寺
藤枝　良太　因伯組　専證寺
前田　賢龍　石西組　専龍寺

第一補充員
片山　環　近江第十一組　蓮覺寺

第二補充員
川嶋　正　山城第一組　法寿寺

【敬称略】

※毎月掲載の「ことば」は、教区駐在教導（谷本・梅溪）が担当しています。

駐在日記

新型コロナウイルスの影響で全国に緊急事態宣言が出ていた時、気になるニュースがあった。不要不急の外出を控えてもらうため、他府県ナンバーの車は入ってこないように、と各地で呼びかけているという内容だった▼自分は京都で生活しているが、愛車は「岐阜ナンバー」だ。「他府県ナンバーの車が目につく」という発言や、車が傷つけられた等のニュースを見ては不安と憤りを感じた。その人の背景を考えず、ナンバーの表記だけで厄介者扱いされることが納得できなかった▼もやもやしながら考えた。今回は自分が「他府県ナンバー」という立場だから「それだけで判断されては困る」と思ったが、他の事はどうなのか。マスク無しで歩く人を見れば「大丈夫か？」と思い、家族連れの買い物客を見れば「今はどうなの？」と思う。「他府県ナンバー」に不安を持つ人とさして変わらない▼どこまでも「自分中心」で生きていることが、「コロナウイルス」という非常事態によって露わになってきたように思う。「自分中心」の危うさを教えられなければ対立と差別しか生まれないのではないか。愛車のナンバープレートを眺めながら、そんなことを思った。

（駐在教導　梅溪　真人）

真宗大谷派 京都教区 教化広報誌
「教区だより」特別号　Vol.３
発行人　日野　隆文（真宗大谷派京都教務所長）
発行日　2020（令和2）年7月1日
発行所　真宗大谷派京都教務所
〒600－8164　京都市下京区花屋町通烏丸西入
Tel：075（351）5260　Fax：075（351）5256
メールアドレス：kyoto@higashihonganji.or.jp
ホームページ：http://www.k-kyoku.net/